

五章 回復

あとから考えてみれば、体力より先に気力が回復し始めた、ということなのだろうが、どん底状態が1カ月近く続いたころ、「もうたくさんだ」と思い始めた。家に逼塞（ひっそく）して、精神的に死んでいるのも同様な状態から、どうにかして脱け出さねばならない、と思い始めたのである。

ちょうど、近所の音楽店からレンタルピアノの代金を払ってくれと催促の電話がかかってきた。横着を決めこんで、8月分から払ってなかったのだ。日本で子どもにピアノを習わせると、何年続くかわからなくても、中古だろうが電子ピアノだろうが、でかくて値の張る楽器を買わなくてはしようがないが、ここでは月いくらでレンタルができるので、引っ越しするうえでもまことに重宝である。会社が引っ越し代を出してくれるといってもピアノの移動代金は個人持ちだから。

やっこらさと着替え（これがけっこう面倒くさい）、車を出し、駐車場からよちよちと歩いていくと、店につくころにはもう足の裏が耐え難いほどジンジンしている。カウンター式のレジの前に座りこんで、払いに来たよ、と言うと顔なじみの親父が帳面を出してきた。

「はい、月7万リラで3カ月21万ね」

7万リラは円に換算すると4千円くらいにあたるが、食料品や衣類の安さを考えると、生活実感としては6千円か7千円くらいではないか。

「え？ 去年は月6万じゃなかった？」

「そうだった？ ちょっと待ってね。去年の契約書は……あ、確かに奥さんの言うとおりの、去年は6万でした」

「どうして上がるの。7万は出さないわ」

値上げするにしたってなんの予告も説明もなしでは、納得がいかない。わたしはむかつ腹をたてた。

「そりゃ奥さん、これはわたしが決めることではない、ピアノの会社が決め

ることで」

「おかしいわ、そんなの。ピアノの値段はものの良し悪しと新しいか古いかで決まるのよ。毎年ピアノは古くなっていくでしょう、あなたこれを今年新しく貸すなら2年前と同じ値段はとれないわよ。去年より価値が下がるものにわたしが去年以上のお金を出す理屈はない」

「でも奥さん、この値段は元々奥さんのために特別サービスしてあったんですよ。6万は最低値段です」

「バカなことをおっしゃい。わたしは2年前ここで借りることに決める前、ミラノの楽器店にも値段を聞いているのよ。あそこでは月4万が最低だった」

「わかりました……けど無理ですよ」

「じゃ月1万の値上げをせめて半分にしなさい。5千なら払うわ」

「は……5千、ま、いいですよ。負けときましょう。月6万5千リラですね」

フンッ、となおも鼻息荒く楽器店を出て歩きながら、イタリアに来て丸3年が過ぎたが、値切ったのは初めてではなかろうか、と苦笑いが湧（わ）いてきた。なんといってもだまされ、ボラレたのが、1回や2回ではすまない。特に車のディーラー、車の修理業者、美容院、電気の修理業者。

ボラレ初めはイタリアにきて直（じき）に6人乗りの車を中古で買ったときだ。ディーラーの親父は最初、車の引き渡し時に代金200万リラの半分で現金で払ってくれたら、残りの金はクリスマスでいいと言っていたのに、二度目に行ったら代金は230万に上がり、しかも現金一括払いを要求したのである。この日本人はこの車をのどから手が出るほど欲しがっている、絶対に買う、と睨（にら）んで足元を見たのだ。やむなくそうしたが、その帰り、ふだん穏やかな夫が一言も口をきかなかった。激怒していたのである。

その後もあちこちでいようにカモにされてきた。日本人だからか、と思ったが、外国人連中と話していると、そうでもない。軒並みやられている。甚（はなは）だしいのはスウェーデン人のレーナの場合で、彼女がアレーゼに引っ越してきたとき、庭が荒れはてていたので庭師を呼んだら、1時間につき5万リラ（約3,500円）を請求された。1日で2万円以上の出費である。知り合いに

こぼすと、

「なんですって、時給5万？ そりゃ詐欺師だわ！ いいこと、うちの庭師を紹介してあげる。時給1万でそりゃあよく働くわよ」

というわけで、来た新しい庭師は……同じ男だった。

「感激の再会」を果たした2人は同時に口をあぐりと開けたが、次の瞬間彼女はこらえきれず笑い転げ、庭師のほうはさすがに恥じたとみえて、見る見るうちにトマトほどに真っ赤っ赤な顔になり、それから初めの5分の1の料金でよおしく働きましたとさ。

無知、不用心ではだまされてあたりまえ、ボラレたくなかったら、前もって評判と相場を聞き集めて誰かの紹介で雇い、なおかつ仕事にかかる前に料金を聞いておくことである。

しかし、友だちに「あそこの修理業者なら、だまさないから行きなさい」と勧めるたびに、こういう台詞（せりふ）を吐かなくてはいけないとは、イタリアはたいした先進国だと思うことである。

断じてこの国は先進国ではないっ！

そう怒鳴ったほうがいっそすっきりする。

フランス人のリディアが夕食を持ってきてくれたとき、ごめんね、遅くなって、娘をカラテに連れて行ったらそこで車が動かなくなったものだから、と息をはずませて謝るので、

「そんなことはいいけど、どこに修理に出した？」とわたしは尋ねた。

「どこってスポーツジムのすぐ隣よ。車が動かないんだから選びようがなかったわ」

「あ、あそこなら大丈夫。ちゃんと修理するし、正直。だまさない。だけどあそこはエンジンやギアなんかのメカだけ修理するのね、車体や電気関係は別の修理業者になるの。あそこが勧めるところには2軒とも、絶対、行っちゃダメよ。2軒ともわたしをだましたわ」

「どうやってだましたのよ？」

「ここに来て2年目のことよ。1軒は事故のあとに車体修理の見積もりを150万リラと言っておいて、できあがったら300万リラと言った。保険屋さんのほうからひとを差し向けてもらったら、300万リラなんて言ってない、30万リラ余計かかるって言っただけだって言うのよ。言い訳までちゃんと用意していたのね。それだっで見積もりより余計かかるなんてまともなところじゃないわ。挙句（あげく）1カ所は修理しなかったのよ。イタリア人の友だちにどうしたらいい？ って聞いたら、そういうときはとにかく怒鳴りつけろ、って2人も言うから、わたし腹をくくって辞書引いて、3日かけて言いたいことを全部決めておいて、近所中に響くような声で怒鳴りあげてやったわ。おかげでイタリア語が格段にうまくなったけど」

「もう1軒は？」

「パワーウィンドウが動かなくなったのよ。そしたら小さなモーターごと取り替えたって部品見せてくれたのに、半年後また動かなくなったから、今度は別の修理業者に行ったの。このあいだ修理したばかりなのに、って。そしたら『奥さん、この部品は取り替えてないよ』だって。『そんなバカな』って言うと、『ほらこれを見てごらんささい、車と同じぐらい古いよ』って素人目にも古そうな枠とモーターを見せるのよ。イタリアは油断できないわ。あなたも気をつけたほうがいいわよ。特に女とみると車のことなんかわからないとなめてくれるから」

これを聞いたリディア、バッテリーの交換に、しょっぱなからぶちかましたという。

「低価格よ、低価格、だいたいこの車たったの100万リラで中古を買ったんだから、高いバッテリーなんかつける気はこれっぽっちもないわよ。それからわたしを外国人と思ってだますんじゃないわよ、いいわね？ わかった!？」

……とてもかなわない。

鬱（うつ）状態を脱するために、わたしはこのリディアに、買い物につきあ

ってくれないかと頼んだ。肉体的にはひとりで車を運転して買い物に行けないわけではない。が、氣力がなかった。こんな勢いのいいのと話していたら、こっちの元氣も出てこようというものではないか。

正解だった。弾（はず）みが見ついた。

次はコンサートに行きたい。

しかし、ひとに病院に迎えに来てもらったうえに晩ご飯まで持ってきてもらって、自分はコンサートに行こう、とは、いくらずうずうしいわたしでも氣がひける。

ちょうど化学療法の前半がすんで、きつい薬はおしまい、次からは副作用のずっと軽い薬を3つ組み合わせて4週間に2回の注射を4サイクル、という後半に入るところだった。薬剤の名前を夫に見せると、うちふたつは夫の会社の製品だと鼻で笑う。初回は血液検査、心電図、レントゲン、診察、注射と時間がかかって、いつごろ終わるかわからない。今まで4回の点滴の際は、いつも誰か友だちが病院まで車で迎えに来てくれていた。恐縮したが、これは必要だった。初めは車内で吐いていたし、嘔吐止めをもらっていても決して氣分がいいわけではなく、バスや地下鉄を乗り継ぎ、駅から自分の車を運転して帰れる体調ではとうていなかったからである。しかし次からは副作用は軽いというし、4週間に2回ずつでは頻繁すぎて、頼みにくい。

「大丈夫。ひとりで行ってひとりで帰る」と言うと、助っ人の調整役をしてくれているマルティンが恐い顔をする。

「気に入らないわ、その考え。誰か一緒のほうがいい。化学療法に変わりはないのよ」

「だから最初は亭主に1日休みをとってもらって、行きも帰りも運転してもらおう。で、様子を見て、こりゃダメだと思ったら2回目からお願いするわ。でもその日大丈夫だと自信がもてるようなら、ひとりで帰る。ならいいでしょう？ そりゃあなたたちの親切はありがたいし、必要なときは遠慮せず頼んできた。だけど自分でできることをひとに頼むことはないじゃない？」

「うーん、だめ」太った二重顎をふるわせてマルティンは頑固に首を振る。

「わたし家で待ってるから電話しなさい。地下鉄の駅のマリノ・ドリーノまで迎えに行く」

点滴を受ける際、薬が体内に入ると同時に腕の中の静脈に冷たさを感じる。血管がどこにあるかわかる、今までにない感覚である。そして2、3分後に、薬が脳に達するのがあきらかにわかる。急に思考力が落ち、霞がかかったような、ぼうつとした感じになるのである。同時に、視力にも変化が生じる。見えてはいるのだが、何かを集中して見てただちに理解するのが難しい、といった状況で、看護師にそう言うと、「ワイン飲んだときみたいって言うわね」とニッコリする。まさに酔ったときの感じと同じで、違うのは陽気にもおしゃべりにもならないことだろう。

ついでに言うと、酔っぱらった、というのをイタリア語の標準語ではウブリアーコ、女の場合はウブリアーカ、と言うが、ミラノ方言ではチュッコ、チュッカ、ひとによってはシュッコみたいに言う。フランス語に近い。それを知ったのは、イタリア語学校でファッションの記事を読み、話し合ったときに、わたしがちょうどはいていた紫色のパンツは今の流行色ね、という話になったときである。1999年だったか。すると、ミラノっ子の先生がクツクツ笑いながら、ミラノ方言でその色はトゥラ・ス・ディ・チュックって言うのよ、と教える。意味は、なんと、「酔っぱらいのゲロの色」。

とたんに隣の日本人生徒は頭をゴンと机にぶつけた。あまりに「美しい」表現の仕方にずっこけたのだ。しかしわたしは先生の説明がわからなかった。先生は、トゥラ・スはティラーレ・スウということね、と言いながら手を腹から口へ向けて持ち上げて見せた。吐く、と言いたかったらしい。しかしわたしの知っていたティラーレ・スウは、ティラミスというケーキの名からだが、引き上げる、つまり気分をひきたてる、という意味でしかなかった。ティラ・ミ・スウというのは、わたしの気分を明るくする、元気づける、という意味なのである。美味しいお菓子の名前らしい。

「チュックはウブリアーコね」と先生は付け加えた。これはわかった。しかしまさかゲロの色とは。

わからなかったもうひとつの理由は、日本では、少なくともわたしがよく飲み歩いて酔っぱらっていた 20 年前ごろは、あまり赤ワインを飲まずビールや日本酒のほうが多かったから、反吐（へど）もイタリアでのようなワイン色ではなく、ベージュ色だったからである。授業が終わってから隣の生徒に尋ねなおすと、彼は正直に言うのが気がひけたのだろう、「酔っぱらいの色っていうことだよ」とニヤリとするだけである。

あとでイタリア人に説明してもらって、わたしは吹き出しながら愕然とし、そして先生の心理を疑った。わたしの好きな色だって知っててあんなこと言うなんて、あの先生わたしに恨みでもあるのかしら？

さて、点滴のあとのこの「ウブリアーカ」な状態では運転は少々危険である。が、幸いなことに、長くは続かなかった。初日は夫の運転で中華街まで行き、米の麺がスープに入ったお気に入りの料理を食べ、中華スーパーであれこれ買い物したら、もうすっきりしていて、思考力も視力も戻っていた。これなら次の週からは、病院で少し休んで「酔いをさました」あと、自分ひとりでバスと地下鉄、自動車を乗り継いで帰れる。

マルティンはあくまで駅まで迎えに出ると言い張っていたので、わたしは病院から電話をした。「今日は亭主の都合が悪くて、朝わたしが運転して駅まで出たの。このあいだの調子だと大丈夫と思うから、あなた迎えに来ないでね」。そして帰ってから、「大丈夫だったわよ、安心してね」と再度電話をしておいた。

その日わたしは病院の帰りに地下鉄の駅間をひとつ分歩き、半年ぶりにミラノの都心を見たのだった。ドゥオモと呼ばれる大聖堂はいつ見ても美しく、荘厳で見るものを圧倒する。そのまわりの建物も浮き彫りをほどこして飾り立てたものばかりで、見ていると生き返ったような気になってくる。まだ足ジンジンがひどくて歩くのは少々難儀で、何度も立ち止まって休まねばならなかったが、観光案内所まで行ってコンサート情報をどうにか手に入れた。さらにもうひとふんばり、地下鉄を乗り換えて日本領事館まで行った。9 月に母が亡くなったあと、相続のために「サイン証明書」なるものが要ったのである。体力が

ないから、地下鉄の階段を登るのがきつい。貧血でもある。階段途中で何度も立ち止まって休んだ。

相続とは人生で一度か二度しか経験しまい。まして海外にいるあいだに起こることはめったにないから、この「サイン証明書」がどんなものかわかるまでに、かなりの時間がかかった。実際は、日本の実印に伴う印鑑証明書の代わりとして、領事館員の目の前でわたしが自分の名前をサイン(署名)として書き、領事館員がそれを本人の自筆にまちがいなし、と証明する文書だった。が、日本の家族から説明を聞いてわけがわからなかったあとにわたしが領事館に電話で尋ねても、説明がいきとどかず、やっぱり何だかよくわからなかった。わたしは誤解をし、さらに日本に問い合わせたがそれでも正確なことが理解できず、しばらくのあいだ混乱していた。それに領事館が、当日には出せないこと、1通2千円近い料金が必要なことなどを告げてくれたのは4度目の電話でのことだった。不親切きわまる。

行ってさらに腹をたてたのは、住所の書き方を「あなたそれは違ってます、ミラノ県アレーゼ市と書くんです。ミラノ市ではありません」と窓口の係員が頭ごなしに言う言い方だった。20年前ならともかく、今では田舎の役場でももう少しマシな口をきく。

わたしたちが初めて記入する書式がわからないのはあたりまえで、それを、学校の先生がものわかりの悪い生徒を叱るように非難される筋あいはない。「あ、そこはこういうふうに書いてください」と言うのが、行儀を心得た大人というものであろう。ましてや係員はその事務手続きで給料をもらっているのである。その給料はどこからくるのか。それに年内に取りに来いだの、もし年を越してもエウロ(英語ではユーロ)でなくリラで払え、それも釣銭のいらないように持ってこいだの、いちいちやかましい。こっちにはこっちの都合がある。帰って夫に話すと、「外務省の人間くらい威張っているやつはいないね」とやっぱり言う。「外国で暮らす個々の日本人を大事にする、って考えはアイツらの頭にないんだよ。いつも顔が本国に向いてる」

あんまり頭にきたから、わたしは領事館長ならびに全館員様あてに手紙を書

いてやろうかと思った。「あなたがたは、わたしたちの税金から給料をもらっておられる『公僕』、つまりわたしたちのために働いてくださる召使いのような存在であります。しかし、今のあなたがたは威張っていて、わたしたちには不愉快です。『お客様は神様』という民間の店や会社を見習って、もっとわたしたち利用者を主体に考え、配慮がいきとどき、しかも下手にでた、わたしたちの気持ちを傷つけないような対応をされることを、切に希望します」

夫に言うと、「そんなの握りつぶされるだけだよ。それより日本人会報に書いたほうがいい」と笑って断言された。

よっしゃ、書いてやる。

ちょうど間（ま）のいいことに、この「ミラノで乳がん切りました」はタイトルが多少違うが、当時、北イタリア日本人会の毎月の会報に連載中だった。

日本人会の編集長はしたたかで、まずこの原稿を領事館に持って行って領事に見せ、「あなたにはまあ一応見せますが、失礼ですから実際には会報に載（の）せません」としゃあしゃあとやってのけた。領事は「かまいませんよ、どうぞ載せてください」と言ったので、問題なく活字にしたのだと、あとで編集長の奥さんから聞いた。そしてその回の会報の発行後、さほど親しくない2人の日本人から、よくぞ書いてくれた、とわたしに感謝と激励の電話がかかってきた。領事館にはひとり威張りくさった「お局（つぼね）様」がいて、みんな腹をたてている、これで溜飲（りゅういん）が下がったと言うのである。意外な反響だった。

ところでコンサート情報は、観光案内所ではあまり手に入らなかった。それより国際クラブを通じて手に入れた「Hello Milano（ハロー・ミラノ）」という月間情報誌のようなもののほうが役に立った。わたしがクラシック音楽に興味をもち始めたのは4人の子を産んでからのことで、あまり知識はない。日本の田舎に戻ったら、とてもコンサートに行けないどころかロクに開かれてもいない、行けるのはミラノにいるあいだけだ、という思いがあるから、2年ほど前から手当たりしだいに行っていると、だんだん自分の好みがわかってきた。

元々「バッハ馬鹿」じゃないかと自分で思うくらい、バッハの音楽はわたしの心の中心にまっすぐに入ってきて琴線（きんせん）を揺さぶり、よくもまあ200年前に死んだドイツの音楽家が、わたしの魂のありかを正確に知っていたものだと思うほど、わたしはヨハン・セバスチアン・バッハの音楽に惚れているのだが、なかでも気に入ったのはカンタータという種類の、楽器と声の混ざった宗教曲だった。これは1年の教会行事のあれこれのためにバッハが何年もかけて作曲し、実際の演奏も指揮したもので、約200曲が残っている。これにまた、わたしの大好きなオーボエがけっこう入っているのだ。

オーボエというのはきわめてマイナーな、あまりひとに知られていない楽器である。クラリネットによく似た木管楽器、つまり縦（たて）笛の一種で、わたしの通う音楽学院の院長夫人で事務をしているおばあちゃんに言わせると、「世界で一番美しい音を出す楽器は人間のからだ、その『声』に一番近いのはオーボエ」となる。

わたしはそのオーボエの甘くもの悲しい音色に、1995年アメリカにいる時分に魅せられた。当時8歳と6歳の子を小学校に、4歳ともうじき2歳の子を託児所に送りこみ、英語で英語を習う一生一度の機会だろうと公立短大にとびこんだのだが、好きでとった文化人類学のレポートや、創作の短編小説や詩を外国語で書くのは、このうえなく楽しく、同時に芯（しん）の疲れる作業だった。短大からの帰り、車の中でロック並みの大音量でクラシックのラジオを流す。疲れた脳ミソの中を、川の水がゆったりと流れるように音楽が通り抜け、凝（こ）りをほぐしてくれる。「この曲はいいなあ」と思うたび、バッハだった。しかし「この音色はいいなあ」と思う楽器の名を、数カ月間わたしは知らなかった。知らないまま、好きだった。

オーボエだと知ったのは、翌年日本に帰ってからである。いつか、この楽器が自分でも吹けるようになったらいいなあ。歳をとってから楽器をやるのもいいじゃないか、人生が豊かになって。その思いをかなえようと決心したのは、それまで予想もしていなかったイタリア、しかもオペラの盛んなミラノに住むことになったからだった。これだから人生はわからない。楽しい。アメリカに

住んだことでさえ、実際に行く半年前までは夢にも思わないことだった。

それでも、慣れない土地ではどこに先生がいるかわからない。娘のピアノの先生から聞いて役場に行き、次に図書館に行き、それから公立学校に行って尋ね、最後に隣町の音楽学校にたどり着くまで、途中勇気がなくて逡巡（しゅんじゅん）し、何カ月かかかった。習いだしたら若い先生のお師匠さんが昔スカラ座で吹いていた、という古い、しょっちゅうあちこち故障して音が出なくなる楽器を貸してもらい、おぼつかないイタリア語でわからないところは、先生が吹いてみせてわたしにわからせ、1日1時間をめどに家でプープー吹いた。初めは吹き始めるたびに猫が戸口の傍へ行き、外へ出せとせがんだのは、猫にも音の良し悪しがわかったのだろうか。

そうして、めったにはないオーボエのコンサートにもできるだけ通った。その、わたしの魂を潤してくれるコンサートに、闘病生活に入ってからずっと行っていなかったのだ。わたしの中には飢えと渇きがあった。

どうしても行きたかった。

あくる日に寝こんだとしても。

ドゥオモの近くの教会の一室で、バロック音楽のクリスマス曲の合唱を、室内楽程度の楽器つきでやるというので、わたしが行きたいと言うと夫が俺も行く、と言う。ふだんクラシック音楽に関心のあるひとではないのでわたしがいぶかると、彼は、体調が完全でないあんたをひとりで出すわけには行かない、家で心配しているよりはついて行くほうが安心だ、と言う。優しいひとだ。わたしがやりたがることをやめておけと言うことのまずない、きわめて寛容なひとでもある。もっとも外国暮らしをすると、「なんでもやってみてやろう」式の好奇心に馬力のかいモーターがついたようなわたしは、伴侶としてすごく便利らしく、店や修理業者との交渉はみなわたしまかせで、本人は家でのほほんとしている。ミラノ市内だって、わたしは道を知っているし、地図を片手にどこでも怖（お）じずに運転するが、亭主殿はすごく嫌がる。ま、わたしが今までにさんざん迷って高い授業料を払っただけのことはあるわけだ。

最初にひどく道に迷ったのは、イタリアに住み始めて1週間目だった。夫がミラノ郊外のネルヴィアーノという町の研究所まで初出勤の日で、地下鉄の駅から直通のバスが出ているというから安心してると、1時間ほどして帰ってきた。通勤時間帯をはずれるとバスがなく、タクシーも拾えないから帰ってきた、ここからタクシーを呼んで会社まで行くと言うのである。

タクシー代に1万円はかかりそうな距離だった。そのころは部屋に台所のついたホテルに住んでいたのだが、洗濯機もコインランドリーもなかった。一家6人の衣類を手洗いする余裕がないからパンツまでクリーニングに出していたら、1週間で10万円かかった。手持ちの金はみるみる乏しくなっていく。

わたしは自分がレンタカーを運転して夫を送っていくと言った。

土地勘はゼロ。

無謀の限りである。

行きはよかった。夫がなんとなく方向を理解していたから。

ひとりでの帰りが悲惨だった。とにかく「ミラノ」という表示を頼りに右に曲がり左に曲がりしていたら、気がついたときには信号のない高架道を走っている。

知らずに有料高速道に迷い込んだか!?

ホテルをあわてて出てきたのでわたしは国外免許証（国際免許証）も財布も持っていなかった。出口で料金が払えない。

どうしよう？

心臓はのどのあたりまでせりあがってバックンバックン鳴っている。

しかし、何はともあれ走り続けるほか、ない。

幸い、しばらく行くと一般道になった。あとでわかったが、その高架道は準高速道のようなもので無料だったのだ。

安心して深いふかいため息をついて走っていると、また高架道に乗ってさっき見たのと同じ大きなワインの広告が見えた。途中で道をまちがえて1周し、ご丁寧にもまた同じ高架道に同じ方向から迷い込んだわけである。ゲゲッと思いながら高架道をおりて走っていると、どうも見覚えのある複雑な交差点に出

た。ここで同じまちがいをしたらまた1周高架道を走るハメになる。いくら方向音痴のわたしでもさすがに、同じ方向に曲がってはならないことだけは、わかった。

では、どっちを向いて走るのか？

とりあえず、ここはまっすぐ！

結局、行きは40分だったのに帰りは2時間かかった。どうにかこうにかホテルにたどり着き、ヘトヘトに疲れて足をひきずりながらに部屋に入ると、4人の子がベッドの上でトランポリンよろしくはねまわり、騒ぎまくっている。が、わたしは精魂尽き果てていて、叱るところか一言もしゃべる元気がなく、しばらくはただすわりこんでいた。

その後も、郊外に大きなスーパーがあると聞いて行っては迷い、子どもの同級生の自宅に行くのに迷い、学校に行くのにも病院に行くのにも迷った。そのたびに、「う～ん、ここはどこなんだろう？」「あー、またまちがえた！」「しまった、今アレーゼ行きの標識を通り過ぎた！」と悲鳴をあげていた。でも、どれだけ時間がかかっても、たいてい最後には無事たどり着いた。毎回家にもちゃんと帰れた。そのうち、同じ車に乗っている子どもが「ねえ母さん、ほんとに無事に家に帰れるの？」と不安がって尋ねてきても、「まだ国境を越えてフランスにもスイスにも行ってない。イタリアを走っているから大丈夫！」と答えるようになった。親子して鍛（きた）えられたのである。

さて音楽に話を戻すと、ミラノでのコンサートはたいてい夜の9時から。イタリア人は食べることを大事にするから夕食後ということだろうか。場所は、わたしが行くのは教会が多い。無料のも多い。主催者の負担のしかたによるので、タダなら下手、というわけではないらしい。教会の石や煉瓦づくりの壁はよく音をこだませ、いっそう美しく響かせる。教会によっては、説教壇の後ろに聖歌隊が立つので、ミサの最中に信者からは見えないが、声は天井に昇ってそのまま水平に進み、教会の入り口の壁に沿って、信者の後ろ側から下におりてくる、という音の伝わり方をするとところもあるらしい。建築家もよく心得

ていて、設計のときにそういう配慮をするのだ。まさに千年を越えるカトリックの歴史がなくては演奏の舞台としての教会はなく、わたしの好きな宗教音楽は生まれなかったわけである。

バロックの時代、教会音楽は音の美しさのためではなく、教会のために存在した。聖歌隊で毎週歌っているイタリア人の友だちによると、歌は全部祈りの歌だから、わたしたちは歌いながら祈っていることになるのよ、と言う。ただの歌ではないのだ。

わたし自身にキリスト教の信仰はない。仏教よりは自然信仰の気のある神道のほうにより親しみを感じており、キリスト教の、万物を創造した神というものがある、という考えにはどうも大きな抵抗がある。この世は作られたものではなく、在（あ）るものではないかという感じがするのだ。また、よく言われることだが、ダーウィンの進化論は聖書の天地創造とは違っているじゃないか、とも思う。それをイタリア人に言うと、

「それは昔は科学が発達してなくて、知識がなかったんだからしょうがないよ。でもね、この広～い宇宙の中で生命がいるとわかっているのは地球だけだよ。温度だとか酸素だとか水だとか、ものすごい偶然の積み重ねが、たまたまここで、ここだけで起こったから、生命が生まれ、わたしたちがいるんだよね？」と言う。

「で？」

「それはほんとうに偶然なんだろうか。偶然というにはできすぎじゃないかねえ。むしろ、何者かの意思が働いてそうなったと考えるほうが、納得がいかないか？ つまり神があえて、そう創ったんだよ」

はあ。そうか、ねえ？

しかし、人間を超越し、世界の上に漂っているがごとき、なんらかの意思を持つような持たないような「何か」が存在する、ような気はするし、何人かの友だちから、「毎日お祈りするときに、マドカ、あなたのことも付け加えているのよ。神様に、あなたがよくなるように祈っているから」と聞くと、まことにありがたい話で、苦しいときの神頼みではないが、信仰をもち信仰に支えられ

て暮らすのは決して悪いこととは思えない。

インドネシア人のラニーなどは、がんにかかったわたしのために何人か友人を招き、自宅でわざわざ昼食会を開いてくれた。食べる前には「みんなで祈りましょう」と声をかけ、「天の神様、今わたしたちの友人のマドカががんと闘っています」から始まって最後は「アーメン」で締めくくった。わたしはこういう経験が初めてで、とまどいがなかったとは言わないが、それ以上になんとも説明できない感動があった。ラニーの信仰と友情には、ひどく純粋なものをわたしは感じた。信仰にはこんないいところがあるのに、どうして日本人は「心の弱い人だけが宗教にハマる」という考え方をするのだろうか？ ひとはみなどこかで「迷える子羊」ではないか？

キリスト教に対する第2の疑問点は、キリストは人間の罪を救うために父である神から遣（つか）わされ、人間のために十字架にかかって果てた、というところである。その犠牲精神には頭が下がるが、なんというかあまりに高潔過ぎてずっと受け入れがたいものがある。それよりも、わたしの琴線（きんせん）に触れるのは罪と赦（ゆる）しの考えかたである。どうもわたしの中で、昔自分のおかした罪に対する罪悪感は何年がたっても消えないらしく、どこかで赦されたいと思っているらしい。キリスト教の歌や音楽があれば異教徒のわたしの心を動かすのは、「祈り」と「罪」と「赦し」ではないかという気がする。

しかしその夜のコンサートは、イタリアでは珍しいほどのハズレだった。バイオリンも、何人もの独唱も、あちこちで音をはずしてくれた。素人に毛が生えたような、というか毛も生えていないようなレベルだった。しかも満席で立ちづめだったので、体力の衰えた身にはきつかった。それでも、生の楽器の音は美しく、わたしの心を潤してくれた。

もうひとつ、サン・マルコ教会でのバッハの「クリスマス・オラトリオ」という合唱・独唱つきの器楽曲は、音楽には縁のない夫でさえ「絶品だね」というすばらしいできだった。わたしの好きな楽器や演奏者がよく見える祭壇わきの席で、隙間風が吹き込んで寒いには閉口したが、ドイツから来たというソ

プラノが見事だったうえに、途中で合唱隊から女性がひとり抜けて壁際に立ち、ソプラノの独唱者が一小節だけ「キリエ……」と歌うと、まるでこだまが響くように、一拍おいて同じ澄んだ声質でそれを繰り返すのである。「きゃーっ、いい！」内心わたしは叫んでいた。

こうして、幸いなことに1月に入ると足ジンジンも薄らぎ、買い物にも出られるようになった。体力が完全に戻ったわけではないので、冬のバーゲンはほとんど逃したが、それでも、夫が飲むビールの1箱10キロが、元のようにスーパーでえいやっとかごに入れられる。どうしようもない疲労感が1週間ごとに減っていく。わたしの故郷で言う、日薬（ひぐすり）という言葉思い出した。ひにちが薬、時間がたてば病気は治る、という意味である。

したがって気持ちも明るくなり、人生が戻ってきた、としみじみ思う。

人生はうつくしい。

その美しさとは、白い霧の中に浮かぶ樹の細い梢や、春の光にきらめく若葉であり、大理石の彫刻に覆われたドウオモや、ミラノの建物の各階ごとに異なる窓枠の装飾であり、妙（たえ）なるバイオリンやオーボエの音であり、また家族の愛情や、異なる国から来たひとびととの友情である。

この先何年生きられるかわからない。しかし最後の日まで、あるいは体力気力の続く限り、わたしは人生を楽しもうとするだろう。今できることを追うだろう。その意味では、何年生きようと変わりはない。誰もいずれは死ぬのだ。あなたも含めて。わたしの好きな作家である池波正太郎も、「明日何が起こるかは、誰にもわからない。唯一確かなのは、誰もがいずれは死ぬ、ということである」と書いている。何年生きられるかわからないゆえに、いっそう人生を楽しもうとする、という点ではわたしは得かもしれない。

もちろん不安が全部消えたわけではない。ときおり思い出したように泣く日がある。けれど、その一方で、生き続けている喜びが消えるわけでもない。5年

生存率 71%という数字におびえているころ、このイタリアだけでも何千人とい
るはずの、乳がん患者のことを思った。あのひとたちは、泣かなかっただろ
うか。恐くなかったのだろうか。

泣いたはずである。恐くて、不安だったはずである。運命を怨（うら）んだ
はずである。それでも、10年たったのよ、というひとと病院で話をした。15年
前だったわ、取ったのは、というひともいた。そのひとたちは、恐怖や不安と
同居しながら、その10年、15年を生き抜いてきたのだ。

特別なひとびとは思われぬ。ごく普通のひとびとである。

「マドカ、わたしもよ」と、何人のひとたちがわたしに言ったろうか。子ど
もの学校の元の担任の先生からはあたたかい励ましの手紙をもらった。彼女は
20代と40代と2回、手術と化学療法を繰り返し、今は50代であろう。だいた
い1割くらいの割合で、乳がん患者は両方の乳房にがんができる。わたしにも、
数年後に左の乳房も取り去らなければいけない可能性があるのだ。

母の葬儀で20数年ぶりに会ったところは、元々小柄なひとだったが、そのま
ま可愛らしく歳をとっていた。「まどかちゃん、わたしもよ」と言われて何がわ
たしもかと思ったら、彼女は可憐な中に毅然とした表情で、自分の胸を指差し、
「7年になるわ、わたしもまどかちゃんと同じ病気で手術したのよ」と告げた。
彼女も、不安を抱えて、あるいは越えて、7年の月日を生き抜いてきたのだ。

「まわりのひとには言わないで、でもわたしもよ」と告げた別のイギリス人
は「具合はどう？」とわたしに尋ねた。

「今はいいわ。たくさん泣いたからだと思う」とわたしは答えた。

「ほんとね。わたしもすごく泣いたわ。おかげで今では小さなことでは涙が
出なくなった。そして人生観が変わったわ。明日のことはわからない。確実な
のは今日だけ。だから今日が大事」。彼女は一種の静謐（せいひつ）さ、とでも
いうべき静かな落ち着いた雰囲気をもっていた。その静謐さが、涙が枯れるほ
ど泣いたあとで得られたものであるとは、ある意味壮絶な話である。イタリア
語の家庭教師のパトリツィアはそれを聞いて、「マドカ、代償を払わなければ手
に入らないものがあるのよ」と言った。

わたしは独りではない。仲間がたくさんいる。パトリツィアは、「あなたには夕食を持ってきてくれたりして助けてくれる友だちがたくさんいて、運がいいとひとは言うけれど、でも、死の恐怖を感じ、戦うのはあなただけよね、独りよね。わたしならどうしていいかわからないわ」と一緒に涙を流してくれたが、乳がんが特に白人女性にはありふれた病である、という意味では、わたしは孤独ではない。

そして、何千人という「普通のひとびと」が不安や絶望に耐えられたなら、おそらくわたしにも耐えられるだろう、と思う。わたしは、そのひとたちと同じように、3年先か、30年先かまで、再発や転移があるにしろなにしろ、生きていこう。

繰り返して言う。

人生は美しい。